

## 解答

問一 何の責任もない行きずりの人の目から見れば、定住の地でそれぞれの生業を営み、一生懸命に働き生計をたてている人間のがむしやらかな姿は、ばかばかしく見えることもあり、それはまた関わりのない他者から見た自分自身の姿であるとも思えたから。

問二 文化を理解しようとするときに、実際の生活にとけこまずに外部から観察し、その土地の現状をよく理解しないままに、自分自身の信念や思いこみだけで、定住者の暮らし方を判断する浅はかなものの方。

問三 ① オ ② ウ ③ イ ④ エ

問四 スペインにいたるのだからスペイン人ばかりいるのは当然でありながら、筆者は「外国」ということへのこだわりがなく、スペインも他の国も同じ「世界」の一部であり、一つの世の中、世間であるという意識を持っているため、特定の民族しかないことに違和感をもつようになってしまったから。

問五 筆者たちが住んでいたのはスペインであり、スペインの子供にとっては中国も日本と同じ「外国」でしかない。遊びではありながらも、母国でない地に住みながら自分は中国人ではなく日本人だと主張することは、日本というものにしばられ、こだわりが捨てられないからであり、子供の反問によって自分が世界を世の中であり世間であるにすぎないととらえることができていかなかったと気づかされ、はっとしたから。

問六 歴史を学ぶことで、文化・文明には自国の生粋なものではなく、すべては異なる文化・文明の影響を受けて出来ているということを知り、世界の文化に触れたときの違和感の根元にあるところのものについての納得を通して、何をどう見るかという新たな視点を得られる。また、世界もまた世の中であり、世間であるにすぎないという覚悟を持つことができ、世の中には無限に豊かなものが存在するであろうと思え、豊かな人生が得られる。

問七 貧富

疑（えない）

機械

電灯

欠（かめ）

地域

## 解説

問一 「こうして毎日旅行して歩くと、一生懸命働いている人がバカみたいに見えるね」という言い方を「極端な言い方」「文字通りにとってはならない」と述べていますが、筆者はそこに何程かの真実が含まれているとも評しています。筆者がそう考えるのはなぜか、というのが問われている内容です。

「ときに自分の定住地と生業をはなれて、責任のない目で」、旅行している土地の「人々の生活のありさまを眺めて」といって、それぞれの定住の地でそれぞれの生業を営み一生懸命に働き生計をたてている人間の姿はばかばかしく見えることがあり、それはまた（日本と）関わりのない他者（外国人旅行者）から見た（日本にいるときの）自分の姿であり、それはまた他者から見れば自分自身も虚構の存在にすぎないということにも気づかされることがあるという筆者の意見を読み取り、まとめてみましょう。

問二

まず、西洋音楽の専門家の言説を整理しましょう。西洋の家は石造であるから、音が外に洩れないので自宅で思う存分練習ができるという言説を聞いて、筆者は「びっくりし」ています。石造の家だからといって音が響かないわけではなく、むしろ「音は全階にひびく」のです。筆者は、西洋の定住者たちが「音に対して極めて神経質になって」「おり「極度に神経質になって暮らしている」という事実を紹介しています。つまり専門家の言説は、実情とは異なっていると批判していることがわかりますね。その批判の内容を文章中の言葉と自分の言葉を使ってまとめましょう。

「先（西洋）音楽の専門家は、おそらく（遮音性能のよい）一流のホテル暮らしだけをしていて、（その土地の文化を理解しようをするときに実際に現地の生活に溶け込まずに）石造の家を外部からだけ眺めて（その土地の実情をよく理解しないままに）、自分自身の信念（や思い込み）だけ」でその土地の定住者の暮らし方を観察したり判断したりす

ること。そのような浅はかなもの見方を批判しているのです。

#### 問四

「ときどきは、なぜこうもスペイン人ばかりいるのだろう、と首を傾げる」とは、どういうことでしょうか。特定の民族しかいないことに「異」和感を覚えるということですね。では、なぜこのことが「おかしいこと」なのでしょう。文章中に述べられている内容をたどってみましょう。

ふだん生活している国がどこなのかを意識せず、「世界もまた世の中であり、世間であり」、外国であるということに「だわりすぎる」ことなく生活していると、スペインも他の国も同じ「世界」の一部であり、一つの「世の中」「世間」にすぎないという意識がうまれてくると筆者は述べています。

#### 問五

「閉口した」とは、どういう返答したらよいかわからず困らされたということです。では、なぜスペインの子どもたちにはチーノ（中国人）ではなくハポネス（日本人）なのかと反問されて返答に困ってしまったのでしょうか。

「（スペインの）人々のなかに、（スペインの）世間に融け込んでしまえば、世界もまた世の中であり、世間であるにすぎない」のに、自分が中国人ではなく日本人であると強く意識してしまうということは、日本人であるという「こだわりを捨てる」ことができずにスペインの「世間」に融け込んでいない自分自身に気づかされ、はっとさせられ、そして世界を一つの「世間であるにすぎぬと覚悟できる」ようになることの難しさを考えさせられたからですね。

#### 問六

「自国の歴史を徹底的によく知ること」「相手国の歴史をも」「深く知ること」によってどのようなことが得られるのでしょうか。「歴史についての知（学ぶ）ことで得られる知識」が肉眼（自分の目で実際に見たもの）の裏打ち（補強）されて確かなものになること」となってくれる「こととはどういうことを考えましょう」。

旅行者として実際に世界の文化に触れると、（文化文明に生粋なものなどないのに、純粋な文化文明があるという思い込みがあるために）さまざまな異和感を覚える。そして、「その異和の根元にあるところのものについて、（歴史を学ぶことで文化文明は異質なものととの融合の歴史であることがわかり）その異和感はある意味当然のこととして納得が行く」ということです。そして、旅行者にとって「世界」は「世の中」となり「世間」となり、その中に自文化と異なるところのない共通性や普遍的な価値観を見出し、人生についての深い識見を得ることができると筆者は述べています。